

ココから元気の出る歌集

秋の歌 愛唱歌 あなたにエール!!

城直美 編



高島平ココからステーション 監修

2020 年 10 月

もみじ

明治四十四年

高野辰之作詞 岡野貞一作曲

1 秋の夕日に 照る山もみじ

濃いも薄いも 数ある中に

松をいろどる かえでやつたは

山のふもとの 裾もよう

2 溪たにの流れに 散り浮くもみじ

波にゆられて 離れて寄つて

赤や黄色の 色さまざまに

水の上にも 織る錦

◆もみじ

文部省唱歌。高野は、長野県碓氷峠のある駅から見た紅葉の美しさに惹かれてこの詩を書き上げたそうです。陽当たり・昼夜の寒暖差・湿度、この三つの条件が揃うときれいに色づくのですね。溪谷や川沿いに名勝地が多いのはそういうことなのです。皆さんも今までに色々なところで紅葉狩りをされたことでしょうか。もう一度訪ねてみたいかなと思われるところはどこでしょうか。奥入瀬溪流・鳴子峡・上高地・香嵐溪・京都の寺々・・・遠出しなくても近くの街路樹や公園でも十分楽しむことが出来ます。今年はご近所で季節の移ろいを楽しみたいものです。高野―岡野のコンビは、おぼろ月夜・春の小川・故郷等日本の名曲を数多く残しています。

故郷の空

明治二十一年

スコットランド民謡 大和田建樹作詞

1 夕空晴れて 秋風吹き

月影落ちて 鈴虫鳴く

思えば遠し 故郷の空

ああ わが父母 いかにおわす

2 澄みゆく水に 秋萩垂れ

あきはぎた

玉なす露は すすきに満つ

思えば似たり 故郷の野辺

こきようのべ

ああ わが兄弟 はらから たれと遊ぶ

◆故郷の空

当時（明治の頃）どこの田舎にも見られた風景をわかりやすい言葉にして詩を書いたのは、鉄道唱歌を作った国文学者大和田建樹でした。格調高い日本の名曲として歌い継がれています。故郷を遠く離れて暮らす人が秋の夕暮れに、今頃ふるさとの両親や兄弟たちはどうしているだろうと物思いにふける・・・、言葉の並びが美しく、国文学者ならではの詩になっていると思います。二番まで歌うことは少ないと思いますので、今回は一番二番通して情景を思い浮かべながら口ずさんでほしいと思います。ゆつくりとラーララーラ・・・とたどるだけでも、名曲ならではの味わいがあります。

小さい秋見つけた

昭和三十年

サトウハチロー作詞 中田喜直作曲

1 だれかさんが だれかさんが

だれかさんが 見つけた

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

目かくし鬼さん 手のなる方へ

すましたお耳に かすかにしみた

呼んでる口笛 もずの声

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

2 だれかさんが だれかさんが

だれかさんが 見つけた

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

お部屋は北向き

くもりのガラス

うつろな目の色とかしたミルク

わずかな すきから 秋の風

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

3 だれかさんが だれかさんが

だれかさんが 見つけた

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

むかしのむかしの 風見の鳥の

ぼやけたとさかに

はぜの葉ひとつ

はぜの葉赤くて 入り日色

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

◆小さい秋見つけた

秋を代表する一曲。歌ってみたい・聴いてみたいという人は多いと思います。誰かさんが誰かさんが・と三度繰り返しての歌いはじめ、小さい秋 小さい秋・と、ここも三度繰り返し、最後に小さい秋見つけたと締めくくる曲の作り。とても印象に残る言葉の重ね方と節回しですね。ところで、この誰かさんとはいったい誰なのでしょう？不思議だなーと思って歌っていました。

作詞のサトウハチローは、幼少の頃熱湯で大やけどをして、それが後遺症となり学校へは母に背負われて通ったそうです。体の不自由さもあり、ハチローは家にこもりがちでした。少年の体験がこの歌に刻み込まれているんですね。

「めかくし鬼」とは鬼役の子供が目隠しをして、それ以外の子供は手をたたいて鬼から逃げ回るという遊びです。鬼さんこちら 手のなる方へ・・・そうやって遊んでいた子供たちの楽しそうな声を部屋の中でうらやましように聴いていた、そこに微かにモズの声。秋を感じる一場面だったのでしよう。モズは秋になると、鋭い声で「キーイツ、キーイツ」と鳴き、縄張り争いをする習性があり、秋の季語になっています。

幼少期のハチローがこもっていた部屋は、日が当たらず薄暗い北向き部屋で、不透明な曇りガラス

(すりガラス)に閉ざされていたのでしょうか。

部屋の中で気分はふさいで目はうつろ。溶かした粉ミルクは生気を失った目の色のたとえか、それとも秋の肌寒い中で母親が用意してくれたホットミルクだったのでしょうか。昔の家はよく隙間風が入り込みました。わずかな風を肌で感じ、そこに秋を見つけた、その様な情景だと思います。

母親に背負われて教会にもよく行ったそうです。教会の屋根の風見鶏、もう古くなっていたのですね。はぜの葉を入り日色と表し、夕焼けの真赤な空の色に例えています。家の庭にもハゼノキが植えられていたそうです。家の窓からきつといつも眺めていて、きっとその情景が歌に盛り込まれたのだと思います。

こうやって「誰かさん」は「小さい秋」を感じ取っていたことでしょう。

牧場の朝

昭和七年 小学唱歌

1 ただ一面に立ちこめた

牧場の朝の霧の海

ポプラ並木のうつすりと

黒い底から 勇ましく

鐘が鳴る鳴る かんかんと

2 もう起き出した小舎小舎の こやこや

あたりに高い人の声

霧に包まれ いくむれ あちこちに

動く羊の幾群の

鈴が鳴る鳴る りんりんんと

3 今さし昇る日の影に

夢からさめた森や山

あかい光に染められた

遠い野末に 牧童の

笛が鳴る鳴る ぴいぴいと

◆牧場の朝

文部省唱歌。福島県鏡石町にある岩瀬牧場がモデルになっていて、今では町歌になっています。岩瀬牧場は明治の初め、国内で初めての西欧式牧場として開設され、明治四十年にはオランダより乳牛十三頭と農機具を輸入。その際に日本とオランダの友好の印として「鐘」が贈られました。鐘が鳴る鳴る かんかんと の部分の鐘は、そのことを歌っているのですね。現代の牧場は大分状況が違い近代化されていますが、この歌を歌っていると、開拓当時の様子、広大な牧草地、動物とのふれあい、遠くの牧童の姿が目に見えんできるといえます。

証城寺の狸囃子

大正十三年

野口雨情作詞 中山晋平作曲

しょうじょうじょうじ

証 証 証城寺

証城寺の庭は

ツ ツ 月夜だ

みんな出て 来い来い来い

おいらのともだちア

ぽんぽこ ぽんの ぽん

負けるな 負けるな

和尚さんに 負けるな

来い 来い 来い

来い 来い 来い

みんな出て 来い来い来い

証 証 証城寺

証城寺の萩は

ツ ツ 月夜に 花盛り はなざか

おいらは浮かれて

ぽんぽこ ぽんの ぽん

◆証城寺の狸囃子

詩人で童謡作家であつた野口雨情が千葉県木更津市を訪れた際、童謡の題材にと市内の證誠寺に伝わる「狸囃子伝説」を聞いて作つたとされています。しよ、しよ、しょうじょうじーのように、同じ言葉を繰り返し重ねることで、曲全体がリズム

カルで軽快な音楽になっています。昭和二十

一年から始まつたラジオ英会話のテーマソング

「カムカムエブリボデイ」としても有名です。

題名を證誠寺とせず証城寺にしているのは、登場する寺が架空の場所の方がいいのでは、ということからだと言われていますが、諸説あります。

うさぎ

兎のダンス

大正十三年

野口雨情作詞 中山晋平作曲

1 ソソラ ソラ ソラ

うさぎの ダンス

タラッタ ラッタ ラッタ

ラッタ ラッタ ラッタ ラ

脚で あし 蹴り蹴り け

ピヨッコ ピヨッコ 踊る

耳に鉢巻 はちまき ラッタ ラッタ

ラッタ ラ

2 ソソラ ソラ ソラ

可愛いダンス

タラッタ ラッタ ラッタ

ラッタ ラッタ ラッタ ラ

とんで 跳ね跳ね

ピヨッコ ピヨッコ 踊る

脚に赤靴 あかぐつ ラッタ ラッタ

ラッタ ラ



野菊

昭和十七年

石森延男作詞 下総皖一作曲

1 遠い山から吹いて来る

こ寒い風さむに ゆれながら

けだかく清く 匂う花

きれいな野菊 うすむらさきよ

2 秋の日ざしを浴びてとぶ

とんぼを軽くかる 休ませて

しずかに咲いた 野辺のべの花

やさしい野菊 うすむらさきよ

3 霜が降りても 負けないで

野原や山に むれて咲き

秋のなごりを おしむ花

あかるい野菊 うすむらさきよ

◆野菊

歌いやすい音域、短い旋律に優しい温かい言葉が並んでいます。最後の一節、きれいな野菊 うすむらさきよ の部分は付点音符で結び、印象的な納まりになっています。一番は、秋風に揺れて清らかに咲く様子。二番は、やさしい日差しの中でとんぼをとまらせている様子。三番は、晩秋から初冬にかけてもまだ咲きほこり、霜が降りても枯れることがない姿を「負けないで」と表しています。格調の高い名曲として、秋には欠かせない一曲と言えるでしょう。

里の秋

昭和十六年 NHKラジオ歌謡

斎藤信夫作詞 海沼實作曲

1 静かな 静かな 里の秋

お背戸に木の実の 落ちる夜は

ああ 母さんとただ二人

栗の実 煮てます いろり端ばた

2 明るい 明るい 星の空

鳴き鳴き夜鴨よがもの 渡る夜は

ああ 父さんのあの笑顔

栗の実 食べては 思い出す

3 さよなら さよなら 椰子やしの島

お舟にゆられて 帰られる

ああ 父さんよ ご無事でと

今夜も 母さんと 祈ります

◆里の秋

昭和二十年に川田正子の新曲として発表されましたが反響が大きく翌年ラジオ放送「復員だより」の曲として使われました。一番は、ふるさとの秋を母親と過ごす様子。二番は、出征中の父親を夜空の下で思う様子。三番は、父親の南方からの無事の復員を願う母と子の思いを歌っています。この時代は混んととしていて、父親が無事に帰る事が希望だった家庭や、生きるのに必死だった世相の中、「里の秋」は、年の瀬の人々の心を慰めた一曲であり、今でも秋の名曲として人気があります。

旅愁

明治四十年

オードウェイ作曲 犬童球溪訳詞

1 ふけゆく秋の夜^よ 旅の空の

わびしき思いに ひとり悩む

恋しやふるさと なつかし父母^{おちちは}

夢路にたどるは 故郷の家路^{さと いえじ}

ふけゆく秋の夜 旅の空の

わびしき思いに ひとり悩む

2 窓うつ嵐に 夢もやぶれ

はるけき彼方^{かなた}に こころ迷う

恋しやふるさと なつかし父母

思いに浮かぶは 杜^{もり}のこずえ

窓うつ嵐に 夢もやぶれ

はるけき彼方に こころ迷う

◆旅愁

もともとはアメリカの曲ですが、すっかり日本の唱歌として親しまれています。犬童は東京で音楽の勉強をして、その後各地を転々としていました。新潟に勤務していた頃にこの曲を知り、故郷の熊本県から遠く離れた自分の心情と重ね合わせながら訳詞したそうです。若き青年の苦悩や心の迷いが散文調に書かれていますが、メロディ自体は明るいので、深刻になり過ぎず愛唱歌として歌い継がれているのではないのでしょうか。誰しもこんな時代がありますものね。

長崎の鐘

昭和二十四年

サトウハチロー作詞 古関裕而作曲

1 こよなく晴れた 青空を

悲しと思う せつなさよ

うねりの波の 人の世に

はかなく生きる 野の花よ

なぐさめ 励まし 長崎の

ああ 長崎の 鐘が鳴る

2 召されて妻は 天国へ

別れてひとり 旅立ちぬ

かたみに残る ロザリオの

鎖に白き わが涙

なぐさめ 励まし 長崎の

ああ 長崎の 鐘が鳴る

◆長崎の鐘

この詩には原爆を直接描写した部分は全くなく、サトウは戦災を受けた全ての人々に対する鎮魂歌として、打ちひしがれた人々のために再起を願って書いたと言われています。西洋音楽を学んだ古関が格調高く曲をつけています。なぐさめから明るい曲調に変わるところが、印象的なメロディとして心に残ります。藤山一郎が正統派の歌唱力をもって、みごとに歌い上げています。

参考資料

日本童謡唱歌全集

足羽彰編

童謡・唱歌の世界

金田一春彦著 他

編集 城直美

監修 高島平三からステーション (20201025)